

## 第4回 スパルタを襲った直下型地震 – 特異なポリスの震災復興

1967年のアカデミー賞映画「夜の大捜査線」（原作名「夜の熱気の中で」）は、人種差別が厳しいアメリカ南部の小さな町で起きた殺人事件と腕利きの黒人刑事（シドニー・ポアチエ）の物語だ。ことごとく黒人刑事の捜査と対立する警察署長（ロッド・スタイガー）、捜査の様子を白い目で見ると住民たちの緊張した関係には当時の公民権運動の緊迫感を感じ取ることができる。その小さな町の名は「スパルタ」といった。おそらく古代ギリシアで特異なポリスのスパルタも同様の緊迫感を持っていたのだろう。



古代（前8世紀～前4世紀）のペロポネソス半島南部

前1000年頃、ペロポネソス半島にドーリア人が南下し、先住民を武力で制圧してアルゴスやメッセネ、スパルタ（ラケダイモン）などのポリスが生まれた。なかでもラコニア地方、タユゲトス山脈とパルノン山脈にはさまれたエウロタス川沿いの肥沃な渓谷地帯に拠点をついたスパルタは軍事的にも強く、多数の被征服民を奴隷（ヘイロータイ）として農作業に従事させ、スパルタ人は軍事教練を伴う共同生活を行った。リュクルゴスの改革として知られる一連の体制強化は、土地政策（公有地と分割地）とともに戦士共同体を築くもので、前6世紀には半島の大部分を支配する強大な国家となった。

城壁のない市域で集団生活をしたスパルタ市民は想像するより自由で、女性の地位も他のポリスより高かったことはプルタルコスが「スパルタ女性の言説」に残した以下の寸言から読み取れる。

–アテナイの女に「どうしてあんたたち（スパルタ女）は男たちを支配できるの」と聞かれ、  
「だってあの強い男たちを生んだのはわたしたち女ですもの」と答えた–

スパルタ市民は、はるかに人口の多いヘイロータイやペリオイコイ（周辺民）に囲まれ、つねに反乱の懸念と強力ポリスであるアルゴスやアテナイとの覇権争いに耐えるために、自由・自治・自給自足という古代

ギリシア世界の理念を極限にまで推し進める必要に迫られていた。その直接民主政とは賛否を「大声で叫ぶ」ことによって表明したり、成文化した法律をいっさい持たないという徹底したものだ。男子は7歳になると共同生活（軍事教練）に入り、18歳以上の市民は15人程度のグループで共同食事をした。住宅も食事も質素なもので、市の中心部にはかたちばかりのアクロポリス（神殿）があるのみだった。古代オリンピック競技のもととなる全裸で運動・競走をする競技法はスパルタから生まれ、女性も丈夫な子供を産むように同じように体育に励んだらしい。スパルタ人の生活様式「質素・儉約・無私」はつねに戦争に備えておくことを目的として作り上げられたものだ。これらの生活は直接民主政をとるスパルタ市民の意志で選択したものだ。

紀元前5世紀の後半にはアテナイを中心とするデロス同盟とスパルタを盟主とするペロポネソス同盟の間で30年に及ぶ戦争が起こった。戦争の遠因となったのがペルシア戦争の15年後、前464年にスパルタを襲った直下型地震だ。1991年の研究論文によるとタユゲトス山脈沿い、スパルタ断層を震源とするマグニチュード7.2の地震だという（Nature 352号）。スパルタには豪壮堅固な住宅や神殿などなく、ほとんどの家屋は倒壊して、ギムナジウム（体育所）にいた多くの少年たちの命をも奪った。死者は2万人を超えたという大震災だ。しかしスパルタが最も恐れていた被支配民・ヘイロータイの反乱が起きたとき、救援に駆けつけたアテナイの軍隊を追い返した。スパルタは反乱を自力で制圧し、大震災からわずかな年数で復興を遂げた。やがてアテナイとの戦争に突入し、結局スパルタ側が勝利を取めた（前404年）ものの、その覇権は30年後にテバイというポリスに奪われる。

いつの世も統治に不満はつきものだ。不満をどう解消するかで政治体制に違いが生ずる。スパルタは500年以上にわたって民主政・戦時体制を維持した。戦争と紛争に明け暮れるなか、凶らずもその体制が震災復興に功を奏したのか。現代では語られることの少ない古代スパルタ社会である。



スパルタ（オリーブ林の手前に古代遺跡、向こうにタユゲトス山脈）（1994年撮影）

（参考図書）

ジョン・ボール「夜の熱気の中で」（早川書房）1967年

（映画「夜の大捜査線」でスパルタという街名が原作ではウェルズという名であることに注意）

太田秀通「スパルタとアテネー古典古代のポリス社会」（岩波新書）1970年

PLUTARCH “ON SPARTA “（Penguin Classics）1988年

P.Cartledge “The Spartans “（Vintage）2004年